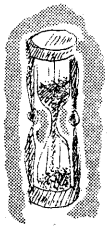
「始まり」をめぐって
―人間の発達との関連で―

南舘忠智



1　最初と最後の類似点

この四月号は「始まり」が特集テーマとのことです。始まり、とはいかにも含蓄あるテーマではありませんか。編集のかたからお誘いをうけてホイホイとのったとしても、のった当人を尻軽と軽蔑するのは当たりません。テーマそのものがそれだけ魅力的なのですから。加えて、筆をとったきょうの日づけが一月一日。一年の始まりの日であることも奇しき縁といえましょう。桜の花咲く四月の号に名のみ新春の元旦などを持ち出さずとも、などと目くじらを立てる向きには構わずに、さっそく始まり始まりィとまいりましょう。

さてこのテーマ、含蓄ある、と言った主たる理由は、「始まり」ということばの受けとめ方にかなりのバリエーションがあるのではなかろうか、と感じたからです。たとえば筆者の場合、すぐ念頭に浮かんだのが「最初と最後の類似点」でした。これがある知能検査に含まれる問題であることをご存じのかたは多いはず。始まりということばに接して、最初と最後の類似点を思い浮かべたその瞬間、筆者自身このことに気づくと同時に、さらに、こんな出来事をも思い出したのです。それはまだ学生のころでした。何かのきっかけから知能検査というものの存在を知るところとなり、それがどんなものなのか実物に当たってみよう、と思い立ったことがありました。もう十数年も以前のことになるはずです。あまり長い期間を要せずして幾種類かの検査を自分の目で確かめられたのは、若さとそれにつきものの性急さのゆえ、と言えそうです。もっとも、自分の目で確かめた、と言うもののそれが確かめたつもり、にすぎないことは、これは今も昔も変わりなし。とにもかくにもこうやって一連の努力の結果感じ得た印象は、フーン知能検査とはこういうものなのか、でした。それ以上の満足で

もなければ、それ以下の失望でもなかったのです。今にして思えば、スタートにおける気負い立ちとゴール時点での素っ気なさとの間には大変な落差があるのに、あの時、肩すかしを食わせた自分に憤りを覚える自分を感じた記憶はほとんど全くありません。この不思議を解くカギがまさに、先ほどの最初と最後の類似点を問う小問との出会いにあるわけです。

この小問との出会いは、やや誇張して言うなら、筆者を軽い興奮状態におとすのに十分でした。なぜそうだったのか、じつのところよくわかりません。あの直後でも、うまく説明できたかどうか。多分できなかったのでなかろうか、そんな気がします。今ここで言えるのは、思わぬところでヒョッコリ幼友だちに出くわした、いや違う、気がついたら鏡の前に立っていて誰だろうとのぞきこんだらそれは自分、いやまだ違う、もっと有り体に言うなら、前を歩いている人の姿をよくよく見たらそれがなんと自分自身の後ろ姿。いわばこんなカテゴリに属する経験だった、と言えそうです。それと出会うことによって自分の中に不定形の形をとって存在していた何事かがしだいにハッキリと浮かびあがってくる。そのモヤモヤしたものの中味が「最初と最後」という用語法によってかなりの程度まで鮮明にとらえられそうだ。「……の類似点」とまで言い切ってしまうとかえって不都合が起こりそうなのだが、いずれにせよ、最初と最後、ここまでは極めてイイ線イッテイル。まあ、こんなふうな出来事だった、と言って大きな誤りはないように思います。

2　人生における絶対的「始まり」

ちっぽけな個人的経験をながながとつづってしまいました。「始まり」ということばの受けとめ方が多種多様なのではなかろうか。要するにそう言いたかったのです。このようにいくら書きつらねてみても、このことが直接的に立証されるものでないことは、明らか。あなたの場合はいかでですか、と問いかけたい衝動を覚えるのですが、今すぐにはどうしようもないこともまた明らか。そこで、典型的と思われるいくつかのタイプを次にあげてみようと思います。

いささか雑然としたあげ方になってしまうのですが、その第一は始まりに絶対的なニュアンスをかなり色濃く含みもたせるタイプです。この中にもバリエーションが認められそう。その最右翼に位するのが、不変性を本質とする同一状態の持続を、発想の根底にすえるタイプでしょう。ひとりの人間の「人生」と言うとき、これが少なくないようです。人びとの人生はそれぞれ固有の性質をもち、それはおのおの（誕生あるいは受精）の瞬間に始ま

り、持続し、やがて迎える死の瞬間に終わる、とされる場合がこれです。人間、生きているうちがハナ、死んだらそれまで。このことばこそこの立場の真髄を端的に表わしています。始まりと終りの「間」は、それ自体としては明確に意識されていません。間が始まりと合体され、一つの位相とみなされ扱われている、と言ったらよいのかもしれません。

どうもわたしの考えと違う、とおっしゃる方。あなたは次のバリエーションに属しておられるのでは？　それは、始まりと終りを一本の軸の両極端に位置づける発想法です。先ほどのを「線」の発想と呼ぶなら、こちらは「点」の発想と呼ぶのがふさわしいでしょう。今度は、始めと間とはハッキリと区別されていて、間の部分にいくつかの中間段階を設定することも許されます。全く変わることのない状態が持続される、とする考えの代りに、変化ないし変容の概念が根底にすえられたことは明らか。人間の発達現象を解明する際の発達段階の考え方は、原則的にこのカテゴリに属する、と言えそうです。たがいに区別され得る質的相違をもった段階の連続として人間の一生をとらえるわけで、一連の位相の変遷という側面に注目するなら、このバリエーションでは絶対的なニュアンスがかなり薄められた、とみなされるかもしれません。

この側面だけを強調してよいなら、そのような結論が導かれましょう。しかし、それは早計にすぎるように思われます。絶対性のやや減った始めの段階と終りの段階に、いくつかの中間段階を含めて、それらがたがいに取って代われるものかどうか、たずねてみましょう。戻ってくる答えは、ノー、それは無理だ、でしょう。これ以外の回答はまずあり得ません。とすると、全体をおおっていた絶対性が（なくなったのではなしに）各部分に分割され分散されただけ、と言うのが妥当なのではないでしょうか、また、同時に複数個の「始めと（中間段階と）終り」が考えられますか、とたずねたらどんな答えが返ってくるでしょう。このような問いは、ほとんどの場合、けげんな顔をされるのがオチ。どだいそんな発想はこのバリエーションにとってラチ外なのですから。

3　発達における相対的「始まり」

さてさてそれでは「始まり」の、別のタイプの受けとめ方とは何なのか。その特徴はこれまでの行きがかりから、相対的ということで把握されねばならぬはず。とネタが割れてしまっては、長談義はもはや無用の長物。ここはサッサと進めましょう。

ある事象の解明に際して「始まり」に相対性をもたらす技法

を、二つに限って取りあげてみます。始まりを二つ以上同時に扱うことと、相互通行的に扱うこと、の二つです。これはいずれも、事象をよりミクロ（微視的）にとらえることを前提としていることが、すぐに明らかになるでしょう。

まず、始まりを二つ以上同時に扱うことから。これは、ある一つの事象のありさまを解明するのに、ある場合にはひとりの個人内で二つ、あるいはそれ以上の「始まり→中間段階→終り」を考え、またある場合には二人以上の人びとの間で（当然二つ以上になる）「始まり→中間段階→終り」を考えることをさしているのです。

同一個人の場合、具体的には、認知的とか情動的とか呼ばれている位相相互間におけるものであるかも、あるいはたとえば認知的とまとめられる中での二つ以上であるかもしれません。そのいずれであるにせよ、ここで重要なのは、個人の内部に重層的な構造性を想定している点です。このようなモデルを考えることは、本人がそれを意識するかどうかとは一応別に、わたしたちのふるまいを理解するのに役立つと思います。

このわく組みを、二人以上が交流する場合にも当てはめようとする試みは、むしろ当然と言ってよいでしょう。従来ややもすると、このような発想法がたとえばコミュニケーション研究と銘うたれた限られた領域でしかとられなかった事実こそ、改めて見直されねばなりますまい。ことさら相手への伝達を意識していなくても、わたしたちは相手の存在とのかかわりの中でもろもろのふるまいを実行しているのですから。

次に、相互通行的に扱うことについて。これは、始まり→中間段階→終りという、誰にもスンナリと受けいれてもらえる自然な流れに「水をさす」ことにほかなりません。そうです、「始まり↑↓中間段階↑↓終り」と考えるのです。終りが先で、始まりが後！などとビックリされるのも、当然と言えば当然。ただし、字面だけにこだわって大騒ぎするのは、ほどほどに願います。

ここでたいせつなポイントは、事象の推移がすべて一方的あるいは非可逆的に進行するとは断言できない、という含意です。わたしたちの身辺に非可逆的な特性をもつ事象が多いのは確か。人間の発達現象はその中でもこの傾向を強くもつものの一つと言えましょう。一度経験したという事実とその影響を容易に消し去ることはできません。このことを十分認めたうえでなお、それがすべてなのではない、そうでない部分が存在する、と主張するのです。

4　今後のための交通整理

目下進行中のこの伝達作業がから回りしているのではないか、と恐れます。歯車のかみ合いをよくするために、ここで二、三の確認をしたいと思います。

筆者が今回の執筆に際してひそかに目論んでいる事柄は、その原則線において、これまで三回にわたって扱ってきた内容と変わりません。少しばかり新しい味つけがあるとすれば、それは発達現象のとらえ方にかかわる「すそ野」をかなり気ままに歩きまわった点につきるでしょう。山の七、八合目に身をおくときにはいや応なしに要求される緊迫感が、すそ野の散策となるとどこかへ消え散り、代ってあれこれの「雑念」がまぎれこんできます。よく言えば、より広い自由な視野から見直しができる（はず）なのですが、実際は逆にそのために印象が散漫になっただけかもしれません。

しかし筆者自身にとっては思わぬ「拾いもの」がありました。今回「始まり」という角度から人間の発達現象にアプローチしようとする中で、かりにマルチ・チャネル性とでも呼んでおきたい特性の重要さに改めて気づくことができたのです。これは、乳児期に目だつ感覚機能どうしの、あるいは感覚機能と運動機能との協応の現象が含みをもつ特質を、より広く人間が営んでいるもろもろの機能相互間に押し広げたいためのかりの用語です。これまでにもたとえば「概念ヒエラルキー」とか「認知構造」といった専門用語があったわけですが、これらがどのようにして形成されていくのか、その形成プロセスにもっと焦点をしぼりたい。そんな願望が生みだした所産とお考えいただいて結構です。

ここまで述べてきて、もう一つの拾いものに気づきました。とても厄介な「お荷物」とでも言いたい代物（しろもの）です。発達にかかわる教育作用の位置づけ、と呼んでみましょう。形成のプロセス！とたえず心の中で叫びつづけながら、今回はこの土壇場までついぞ一度も教育の二字にふれることがなかったはず。積極的な意味あいでふれなかったのではなく、ついつい避けて通ったその結果にすぎません。前回までは乱暴なまでに威勢よく、発達だ、教育だ、と連呼していたはずなのに。いわゆる観念的にアジるのでなく、その正体を見据え、正当に位置づける作業のシンドさに、あえなく腰くだけ。そうこきおろされても反論のしようがないようです。

次回までにはなんとか態勢をたて直し、その上で、幼児にとっての「聖域」、遊びの問題に正面から切りこんでみたい、というのが視野点における願望です。

（三重大学）（つづく）